



昨年の夏、私は、タイ北部の国境の街やゴールドトライアングル、山岳民族の村落などを訪れたが、変貌著しい現地の素顔を紹介したいと思う。

最初に訪れたタイ第2の都市チェンマイ市内から山手の方に車を走らせると、父親が象の調教師をしている山岳民族モン族の子ども達が無邪気に遊んでいた。

チェンマイを車で出発して3時間余、タイで最も標高の高い都市であるチェンライを経て更に北方へ60km程行った所にラオスとの国境の街、古都チェンセーンがある。メコン河の辺の静かな街であるが、近年メコン河の開発に伴って他国への玄関口として注目を集めている所でもある。

ここからメコン河沿いを北へ9kmほど進むと、かの有名な黄金の三角地帯（ゴールドトライアングル）に辿り着くことになる。

タイ、ミャンマー、ラオスの三国が大河メコンを挟んで国境を接している所だ。

かつてこの地域は阿片（麻薬）の産地として知られ、世界の阿片流通量の約70%を占めていた。中国系ビルマ人で麻薬王といわれたボスのクンサーは民兵5千人を擁して麻薬流通の大部分を押さえ、山間部は元より、北部国境の街に至るまで麻薬に係わる犯罪が横行していた無法地帯でもあった。

麻薬は今でも一部がミャンマー領の奥地で生産されているようであるが、クンサーはミャンマー政府に帰順し、国境地帯では以前のような危険な雰囲気は見られず、リゾートホテルやカジノなども進出し環境は一変していた。

そもそも彼の地が一大阿片の生産地となった切っ掛けは、蒋介石の中国・国民党が、毛沢東率いる人民解放軍との戦いに破れ、国民党軍敗残兵約1万5千人が国境を越えてビルマ領内に逃げ込み、ビルマ、タイ国境の山岳地帯の少数民族を支配、資金源としてケシの栽培を奨励したことにあるといわれている。

この山岳地帯には、それぞれ独自の文化を築き、独自の言語と風習を固く守って生活している少数

民族の村落がある。

かつては一面ケシ畑であった山間部も、今ではタイ政府の指導で代替作物の茶や蜜柑、陸稲、

キャッサバ等が栽培されていた。ヤオ族の部落では、お婆さんと娘さんが一生懸命に刺しゅうの織物を編んでいる光景に出会ったが、麻薬の製造が禁止になって現金収入が減少した分を編み物の内職をしているのであろう。

また驚いたことには、山岳民族の中には凧揚げ、独楽回し、花火、竹馬、ブランコ遊びの他、新年には餅つきをし、豆腐、ちまきを食べ、囲炉裏を囲んで食事をするという習慣があることである。

この地域の山岳民族の多くは、チベット方面から中国雲南省を経て南下して来たり、中国の四川省、湖南省辺りを起源とし、漢民族の圧迫により移動して来たという経緯があることから中国の生活様式を受け継いでいるところがあるようだ。しかし、日本にも見られるこれらの風俗や食習慣を思うとき、日本の生活や食文化のルーツを見るようで何か不思議な感動を禁じえない。

地理的環境や特異な少数民族言語、精霊信仰など我々日本人には遠い存在と思われていた山岳民族の間にも、日本人と共通の生活文化が息づいていることに驚きと共に親近感を抱かずにおれなかった。

最後に訪れたのはミャンマーとの国境の街メーサイである。以前は麻薬の密売や売春なども行われ、治安も悪く一般の観光客などは立ち寄れる所ではなかったが、現在ではタイ領内で行商するミャンマー人などが国境ゲートを頻繁に往来しており、また付近の露店や商店街には中国やミャンマーから流入してきた貴金属品や食料品、日用雑貨類が雑然と並べられており、生活臭漂う活気に満ちた街の様子からは国境地帯が平和であることを窺わせていた。

こまい たかお（図書館・参事）

本学図書館所蔵の山岳民族の図書（タイ関係）
 黄色い葉の精霊：インドシナ山岳民族（平凡社）
 タイ山岳民族カレン（朱鷺書房）
 タイ山岳民族言語入門（泰流社）
 神話の人々：タイ山岳民族の染織工芸（紫紅社）



黄金の三角地帯とメコン河